

## 戦いの犠牲者

弥生時代は、稲作が行われ、のどかな風景を思い浮かべる方が多いと思いますが、食物生産力の増加は、ムラとムラの戦いを激化させたと考えられます。人が人を殺した証拠は縄文時代にもありますが、それは狩猟用の道具を用いたものです。弥生時代には、大陸から有用な文化とともに、人殺しに特化した武器も入ってきました。

九州などでは首が切り落とされた遺体や、剣や鎌が刺さった遺体が見つかっており、戦いなどで殺された人と考えられています。

近畿地方では多くの場合、骨などは腐って検出されませんが、稀に遺体が葬られていたと考えられる場所から石製の武器が出土します。こうした場合、武器は死者に奉られた副葬品と考えることもできますが、出土遺物を詳細に観察すると、骨に当たって破損したものが多く含まれていることがわかります。こうしたことから、見つかった武器によって絶命した可能性が高いと考えられます。

京都府内では京都市東土川遺跡<sup>ひがしつちかわ</sup>、大山崎町下植野南遺跡<sup>しもうえのみなみ</sup>、南丹市池上遺跡<sup>いけがみ</sup>、京丹后市豊谷墳墓群<sup>とよたに</sup>などで、石製武器が出土した墓が



発見されています。特に東土川遺跡では、方形周溝墓の溝の中を掘りくぼめて安置した木棺の中から、磨製の石剣<sup>せつけん</sup>や打製の石鎌<sup>せきぞく</sup>が数多く出土しました。多数の矢を受け、剣で刺され壮絶な死を迎えた人であることがわかります。

石剣・石鎌の入った埋葬施設（東土川遺跡）

（中川和哉）